



夫の腎臓と、笑うわたし

両角 晴香

わたしの体内には、腎臓が3つあります。3つのうちの2つは、生まれながらに背中についている自己腎です。もう一つは、3年前に夫からもらった移植腎です。これはおへその下の右腹にくっついています。

わたしは、中学1年生の時にIgA腎症という難病患者になりました。数十年かけてゆるやかに腎臓病は悪化し、36歳で末期腎不全に至りました。その2年後に、夫から腎臓を一つわけてもらう腎臓移植手術を受け、私は25年ぶりに、重い荷物をおろし、ぐっすり眠ることができました。結婚11年目の出来事でした。

手術前の夫の腎機能は90%ありました。それを夫婦で、はんぶんこ。現在は、45%×2の腎機能を保ちながら、夫婦で楽しく暮らしています。夫はわたしの一部であり、わたしは夫の一部です。

夫からもらった腎臓は、大きめのアボカドサイズほどあります。だから、わたしのお腹はふっくらしていて、「おめでたじゃない？」と声に出して聞かれたことが一度や二度ではありません（しかも全員男性にです。恥ずかしい〜）。自粛期間中に、少し食べすぎたかな。わたしは、腎移植から丸3年が経過した2021年春に、市民ランナーの夫にくっついてジョギングをはじめました。

これが、ちょっとした感動体験だったので、よかったら聞いてください。

かつての腎臓病患者には、厳しい運動制限が強いられていました。

「とにかく安静にしてね」というのが医師のスタンダードのアドバイスで、医師の言いつけを守ったわたしは、運動も体を動かすのも大の苦手になりました。最後にジョギングをしたのはいつだっけ。28歳の時だっけ。

さあ、いざ走り始めると、なんじゃこりゃ、と。筋肉はふにやふにやだし、膝は痛いし、ものの数分で呼吸が荒くなりました。

自分の体のがっかりしながら走っていると、夫がスマホを取り出して加山雄三&谷村新司の名曲「サライ」をかけてくれました。「24時間テレビ」の感動シーンを再現するという“ボケ”です。

人通りのある歩道で、サライを流しながら小太りのおばさんが体を揺らして走ってるなんて、みっともないですよ。笑うしかない！ だから開き直って走る、走る、走る。さらに、走る、走る、走る。足のバネでぐんと体が跳ねる。大きく手を振って空気を切る。風に髪がなびいて、気持ちいいー！

サライの歌詞に誘われたのか、上機嫌になったわたしは、ふっと思い出しました。

病気になる前の小学生のわたしは、走るのが大好きでした。取り柄なんてなかったけど、走力と体力だけは自信がありました。

「将来の夢はスプリンター」

と言って、クラスメイトに笑われたことも、ついでに思い出しました。胸が熱くなりました。

腎移植とは、人を再生させる医療だとわたしは思っています。単に体を治すだけでなく、本来の自分を取り戻してくれる医療なのです。

そんなわたしのフィルターを通して腎移植という医療を知る友人・知人は、腎

移植というものを好意的に受け止めてくれるように思います。

旦那さんが大好きな 30 代女性 A ちゃんは、「不謹慎かもしれないけど、うらやましい。わたしもダンナの腎臓がほしい」と言いました。

この春、娘さんが大学に進学されたという 40 代男性 B さんは、「必要とする人がいるなら他人にあげてもいいよ、ぼくの腎臓。だって腎臓 1 つでも生きていけるんでしょ」と言いました。

10 年ぶりに再会した幼なじみのお母さんは、「はるちゃん、ダンナさんから腎臓もらったんやろ？ そんなやさしい男性がこの世におるんやねえ」と言いました。おばちゃんは、数年前から認知症を患っています。ほんの 10 分前のことは記憶できないけど、「はるちゃんの腎臓の話は忘れんっちゃんね」と幼なじみが教えてくれました。

日本には透析患者さんが 34 万人いらっしゃいます。それに対して、腎移植は年間 2000 件程度しかおこなわれていません。腎移植はまだまだレアなのだと思います。

だから、わたしはこのコラムを通して、体験者の日常を綴っていきます。医学書や日本移植学会が発行するファクトブックには書いていない、つかみどころのない話になると思います。

最後に、わたしの拙い文章にお付き合いくださったすべての方に感謝します。

2021 年 5 月 もろずみはるか